わたしたちの黒石

第4集「昔 記録されている地域の様子や伝承・史跡」

中野紅葉山の冬景色

目次

一　「菅江真澄の紀行文」と「津軽道中譚」……4
◆　本文の表記と内容について
二　寛政七年（一七九五）菅江真澄の津軽訪問……8
◆　寛政七年（一七九五）三月津軽領へ
三　獅子頭と権現様・獅子頭を捧げて踊る行事……9
◆　真澄の紀行文　寛政七年（一七九五）十一月一日①
四　高館に住む人の温かい思いやり……14
◆　真澄の紀行文　寛政七年（一七九五）十一月一日②
五　二双子村の産土祭り……16
◆　真澄の紀行文　寛政七年（一七九五）十一月二日
(一)　獅子が澤のしし石―　寛政十年（一七九八）のお話……18
◆　真澄の紀行文　寛政十年（一七九八）七月
(二)　獅子が澤のしし石―　昭和六年（一九三一）のお話……26
(三)　現在の「獅子が澤のしし石」―　市指定民俗文化財……32

六　二双子の「だげぐら」―現在の行事（民俗芸能）……35
(一)開催の準備……37
(二)神前に「獅子頭」と「御幣」を置いて祝詞を奉ずる……41
(三)獅子（獅子頭）の町内回り……42
(四)町内回りを終えて……50
七　上十川の獅子踊―県無形民俗文化財……56
(一)獅子踊の歴史について伝わっているお話……56
(二)獅子踊の行事……61
(三)後継者を育てる活動……64
八　地域に伝わるお地蔵様のお話……70
◆　真澄の紀行文　寛政七年（一七九五）十一月五日
(一)縄をかけられたお地蔵様―下目内澤村……71
(二)嫁をもらったお地蔵様―株梗木村……76
九　法眼寺の梵鐘……79
◆　真澄の紀行文　寛政七年（一七九五）十一月七日・八日①
(一)現在の法眼寺の梵鐘……83
(二)法眼寺の本堂・鐘楼堂―県重宝……87

◆真澄の紀行文　寛政七年（一七九五）十一月八日②・九日・十日
十　中野の「浅尾山・不動尊」……94
◆真澄の紀行文　寛政十年（一七九八）九月二十一日
◆津軽道中譚　万延元年（一八六〇）
(一)寧親公　百本の楓を奉納……104
(二)中野紅葉山の「対植えモミの木」――県天然記念物……108
十一　川端に湧き出ている板留の湯……113
◆津軽道中譚　万延元年（一八六〇）
(一)歌人が親しんだ湯と自然――大正年代……115
◆鱒がのぼってきた浅瀬石川の自然
(二)「上の湯」の川岸で遊んだ頃――昭和年代……119
◆滝に挑む鱒の群れ
◇写真や絵図の出典。参考にした本や資料……126
◇編集。執筆。調査。製作の後援……128

一　「菅江真澄の紀行文」と「津軽道中譚」

ふるさと読本「わたしたちの黒石」第四集は、「昔　記録されている地域の様子や伝承・史跡」という表題です。

※伝承―古くからあるものを受け継いで伝えていくこと・伝えられ受け継がれた物や事柄。

※史跡―歴史上大事な事柄や施設などのあった場所。

No.1　菅江真澄の姿

昔書かれた紀行文や道中記・出来事・絵図の中から、黒石の地域に関係のある事柄を幾つか選んで、そのあらましを紹介します。

それを基に、その地域の様子―伝わってきたお話や行事・自然環境や建造物のたどってきた経過などに関するお話を伝えたいと思います。

※紀行文や道中記―旅行中の体験や感想を書き記した文章。

紹介する内容の中に菅江真澄が書いた紀行

文があります。菅江真澄という人は、宝暦四年（一七五四）頃に三河（現在の愛知県）に生まれた国学と本草学を修めた学者です。

※国学――日本がもともともっている文化を明らかにしようとした学問。古事記・日本書記・万葉集など日本の古典（古い時代に書かれた価値ある書物）の研究を大事にした。

※本草学――植物を中心とする薬物学。

天明三年（一七八三）ごろ、郷里から信濃（現在の長野県）・越後（現在の新潟県）を通って東北・北海道を巡り、文政十二年（一八二九）七十六歳のとき出羽国（羽後・現在の秋田県仙北市）角館で亡くなりました。郷里には帰らず旅をして暮らし、多くの紀行文・日記・絵図・医薬関係の品々を残しています。

津軽には三回ほど訪れています。この津軽に来たときは、当時の津軽の知識人は真澄との交わりを大事にしました。弘前藩でも真澄を「薬物掛」に任命して活動させました。

活用する別な資料の一つに、「津軽道中譚」があります。万延元年（一八六〇）に書かれた「津軽の地を旅する物語」です。この物語を書いた人は、その頃弘前松森町に住んでいた一瓢舎半升という名前の人と言われて

います。昔の黒石地域の様子を知るための内容として活用しました。

※道中―旅行・旅行に出ている間。　※譚―物語

そのほか、江戸時代に限らず、明治・大正・昭和の時代に書かれた内容も必要に応じて取り入れました。

◆　本文の表記と内容について

☆「◆　真澄の紀行文」では、真澄の記録した年月日と、その内容の「あらまし」を述べました。

☆　各章や節の「小見出し」、（　　）で囲んだ年代や説明内容、※印の付いている文、①②などの記号などは、本文の内容を分かりやすくするために筆者が書いたものです。

☆　本文の所々に、日本の古い国名や現在の黒石市及び黒石市周辺の昔の地名が出てきます。それで、次の三枚の略図を載せましたので参考にしてください。

※「水木 ⇓ 高館 ⇓ 黒石、黒石・長谷澤」周辺の略図 ― 十頁～十一頁。

※　東日本の「昔の国名」を載せた略図 ― 八十二頁。

※「黒石 ⇓ 山形」周辺の略図 ― 九十頁～九十一頁。

☆ 真澄が記録した寛政年間の月日は、「旧暦」で書かれていると思います。

※旧暦・新暦について―昔の暦（旧暦）は、「太陰暦」と言って、月の満ち欠け（「新月―満月―新月」となる期間の二十九日半）を一月（大の月三十日、小の月を二十九日）として、作った暦です。

現在使っている暦（新暦）は、「太陽暦」といって地球が太陽を一周する期間（三百六十五日）を一年として作った暦で、日本では明治五年（一八五三）から用いられています。

したがって、旧暦の月日がそのまま現在の月日と同じにはならないわけです。現在使われている暦に、その日が旧暦の何月何日に当たるか記されている場合が多いので、興味のある人は調べてみましょう。新しい発見や調べてみたい課題に気付くこともあります。

☆ 月日は記録されているまま述べましたが、昔使用された「年号・年（例―寛政七年など）」については、西暦の年を（　）に入れました。

真澄の書いた紀行文に限らず、活用した事柄の年号についても同じようにしましたので、述べている内容が今から何年前の出来事なのかすぐ分かることと思います。

その時代の黒石や周辺地域の風俗や人情・その他、昔の様子を捉えることができれば幸いに思います。

二　寛政七年（一七九五）　菅江真澄の津軽訪問

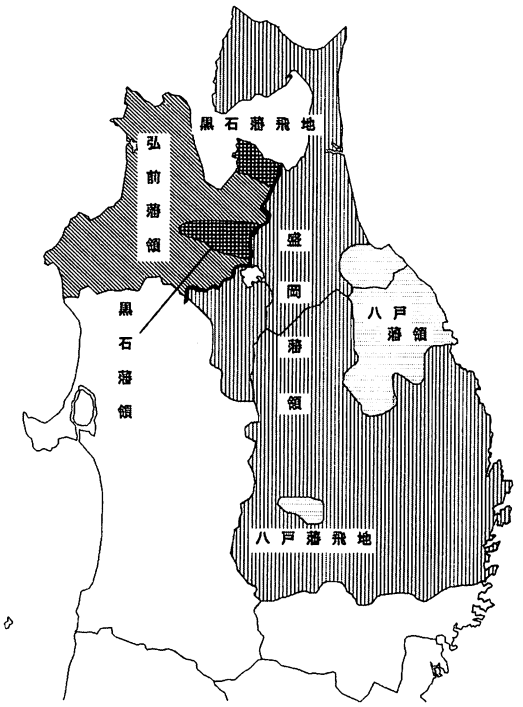
◆　寛政七年（一七九五）三月津軽領へ

北海道を巡った帰りに下北半島（南部領―南部家が治めた領地）に寄って二年六ヶ月ほど暮らした菅江真澄は、寛政七年（一七九五）三月頃、津軽領（津軽家が治めている領地）に入りました。これは三回目の津軽訪問でした。

現在の平内（東津軽郡）地域から青森地域の友人を訪ね、津軽の地を巡って過ごしました。

十月二十三日には水木（藤崎町常盤）に着き、毛内茂粛（神道や歌の学問に優れていた津軽藩士。）という友人の家に泊まりました。

そこに「日本書記」の神代の巻を深く勉強している斎藤規房（文化六年・一八〇九、弘



○弘前藩領・黒石藩領は「津軽領」
○盛岡藩領・八戸藩領は「南部領」

前四代藩主が祀られている高照神社にも勤め、文化十年（一八一三）には神学師範となった津軽藩士。歌の学問を好んだ。）という人も来ていました。真澄は、この人にも前から会いたいと思っていたので、うれしく語り合いました。

そして、十一月一日には、友人の一人である間山祐真（弘前藩士で歌人）を訪ねていくことになります。

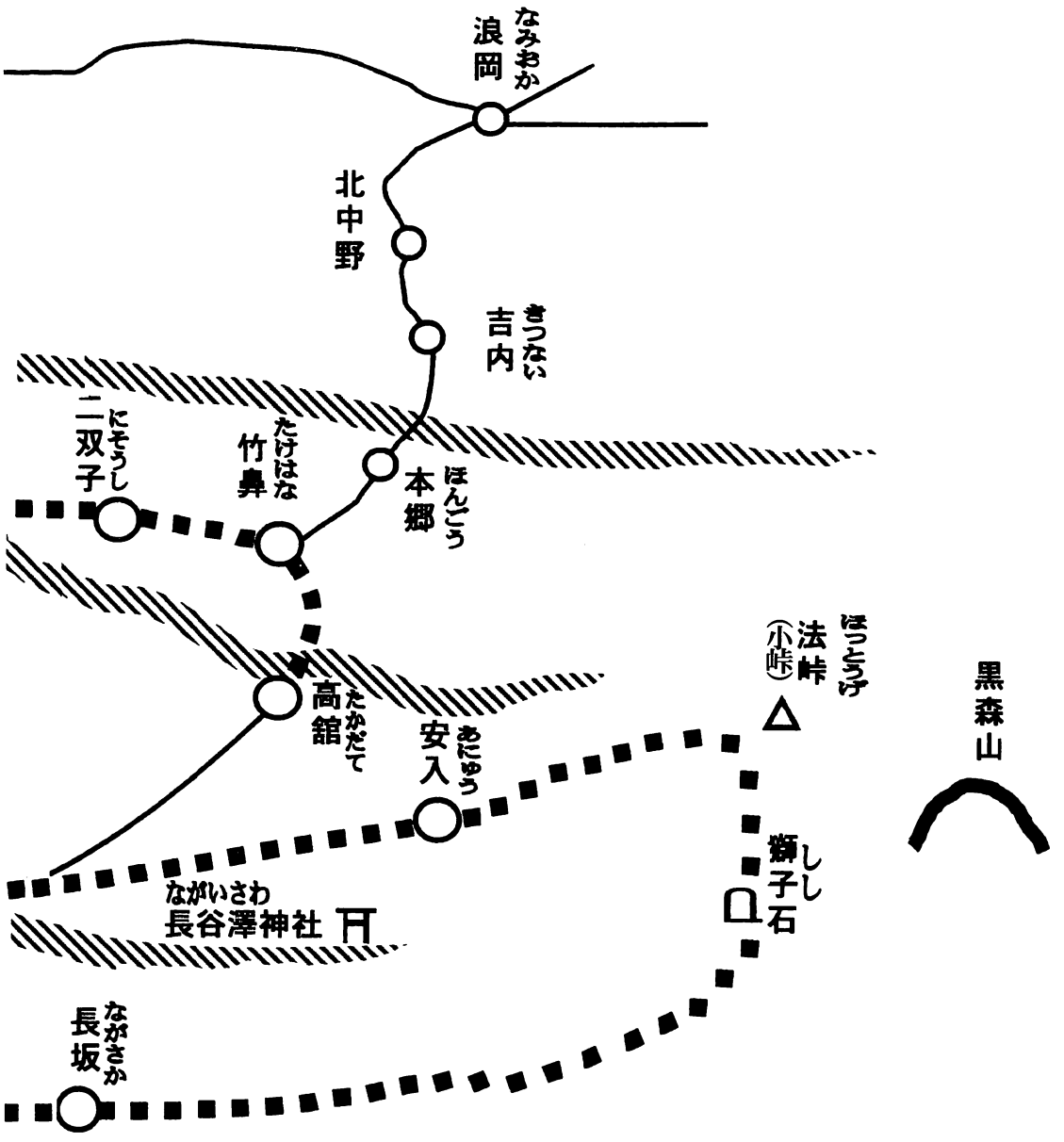
三　獅子頭と権現様・獅子頭を捧げて踊る行事

◆　真澄の紀行文

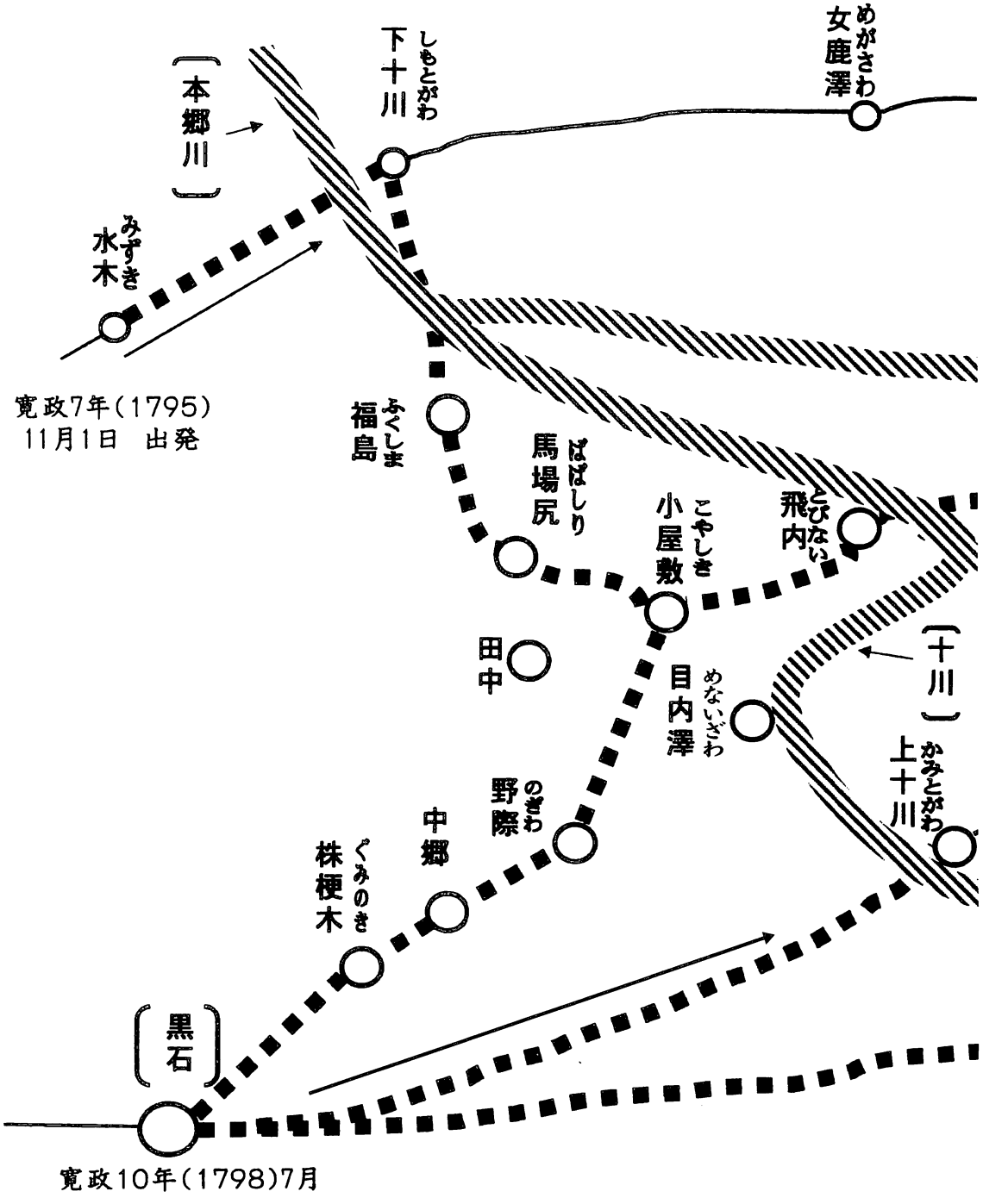
寛政七年（一七九五）十一月一日①

朔の日（一日）、十一月は「霜降り月」とも言われるが、それは名前ばかりでとても雪が降る月である。一日の朝に、水木の村（常盤）を出発しようとして、雪ぐつ、ささみの（笹蓑）笠などを身に着けて出た。規房が見送ってくれた。

昔、親しく語り合った多くの友だちがあちこちに住んでいるので訪ねて行った。昔語り合った間山祐真も村の人とまじって竹鼻に住んでいると聞



[水木 ⇒ 高舘 ⇒ 黒石、黒石・長谷澤] 周辺の略図



■■■■■ は、菅江真澄が歩(あゆ)んだ道

いた。それで、来た道を少しばかり戻り、下十川（浪岡）という村から福島（常盤）、馬場尻、小屋敷、飛内を通って、二双子という村に入り、増館（高館と思われる）という所に、長い年月のたった木々が生えていて、雪の積もった小高い場所を左の方に見て進んだ。

これは、いつの頃のことなのだろうか。射目人の伏見の里からの飛んで来たとかいう権現をこの下に埋めてから「ししもり」という名前で呼ばれていると聞いた。

※射目人――「射目は、狩をするときに身を隠す設備のこと。「射目人」は、そこで獲物をねらう人のこと、という意味がある。もう一つは、狩は獲物を「伏して――うつぶせになって」ねらうことから、地名の「伏見」にかかる枕詞（一つの語――この場合は「伏見」――を美しく飾ったり、調子を整えるためにつける言葉）として用いられている。

※権現――生きているものの苦しみを救うため仏が神に化身して、仮にこの世に現れること。その神を尊んでいう呼び名。神は仏が仮に姿を現したものという考え方に基づいている。

津軽では、獅子舞の「獅子頭」をも権現様と呼んでいる。

その頃（獅子頭を埋めてから）、この森の下道を行き交う人の馬が病気になっ

て倒れたり、乗っている人も馬から落ちたり、という不思議なことがあった。そこで、よくお祈りをし、別なところに伏見権現として祭ってあがめたと言われる。その場所に、雪の中にこんもりと茂っている森の高い梢と、半ばほど現れている鳥居が見えた。

そのことは、五百年ほど前（この紀行文を書いたときより五百年ほど前・一二九五年の頃）の昔のこと、と言い伝えられてきたことで、くわしく知っている人もいないようだ。

陸奥のならわし（生活の習慣）として、どこの浦（入江・海辺）、どこの山里でも、熊野の神様を祭る行事のはじめに、獅子頭を持って踊るということがある。

※陸奥――現在の福島・宮城・岩手・青森の各県と秋田県の一部に当たる地域を指す古い時代の呼び名。昔の国名の略図は八十二頁。

※熊野――和歌山県（三重県）の熊野地方。熊野三山を中心とする古くからの信仰の土地。

そして、その獅子頭をひたすら権現様と言っている。その獅子頭を埋めて塚をつくった所を権現塚、あるいは獅子森と言っている。

こうして竹鼻の村に着いて、柴垣を結いめぐらした友人（間山祐真）の家

を訪ねたが、武蔵の国（江戸―現在の東京地域）に出かけて留守であった。友人の家族に一夜宿泊するように引き止められたが、「またの機会におじゃましましょう。」といって戻った。

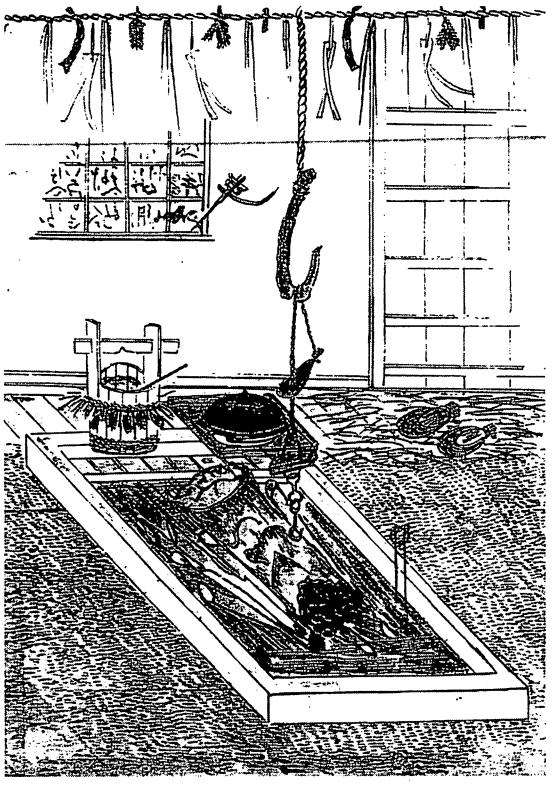
四　高館に住む人の温かい思いやり

◆　真澄の紀行文

寛政七年（一七九五）十一月一日②

夕暮れの雪道なので途中で迷ってしまい、近くの高館という隣りの里まで来た。そこの小さな家を訪ね、柴（雑木の小枝）の焚火にあたらせてもらった。寒さをしのぐだけでも深い情けを感じるもてなしだったのに、主人らしい男が言うには、

「このような雪降りの中を歩き、日も暮れていけば命も危ないでしょう。いくらでも宿はお貸しします。でも、何を着せて寝てもらったらよいのか、それが心配です。食べてもらう物はありますが、寒さにはソリを打つことになるでしょうが、それでよいのであれば、休んでください。」



No.2　真澄の書いた囲炉裏

と言って横座をあけ、

「さあ、ここに居て火にあたってください。」

と言った。そして、切って蓄えてある楢柴を盛んに燃やし、自分たちも脛を出して火にあたった。

※横座―囲炉裏の正面、一家の主人が座る場所。

※寒さにはソリを打つ―寒さが厳しく寝られないということを「寒さにはソリを打つ」と言っていた。

さむざむと冷えていく夜中に、菅の荒いむしろを敷き、猫垣（藁で編んだ筵）というとても重い物を持ってきて体の半分ほどにかけ、こも屏風というものを枕元に立てまわして寝かせてくれた。

※むしろ―筵―藺草や藁などで編んだ敷物。

※こも―真菰を荒く編んだ筵。

※屏風―室内に立てて、風を防いだり仕切りをしたりする家具。

その夫婦の話し声が聞こえてきた。

「この人はどこの人だろうか。この山奥の大雪に迷い歩いて、こんな乞食の小屋のような家に降り込められて寝た、などと聞いたら、家族の人たちはさぞつらい思いをするだろう。」

涙を流しているのだろう、あくびの音が聞こえた。

これほどまで厚い情けを受け、父母のことが思い出されて涙があふれてきた。

五　二双子村の産土祭り

◆　真澄の紀行文

寛政七年（一七九五）十一月二日

次の日、黒石の里を目指して行こうとした。しかし、まっすぐな道であったが、雪を踏み分けて通った人の足跡も無いし雪も降り積もるので、昨日たどってきた里の方に帰った。

そして、二双子村に入って行くと、子供が手習いで練習した紙などで、

明かり障子や窓の戸口などを張り塞いでいる家が雪に埋もれていた。かなり深い知識を持った心の豊かな人が住んでいるのであろう。

休ませてもらいたいと思い、軒の近くまで入っていった。でも、照る日のようにまぶしい白雪を見た眼には中がとても暗かったので、ためらっていた。すると中から声がした。

「見たことのある人のようですね。どうぞお寄りください。」

その人は昨日しばらく語り合って歩いた館山養泊という医者であった。

「今日は雪降りで吹雪も激しいので、また道に迷いますよ。今日は幸いに月ごとに行われる産土祭り（産土神――生まれた土地の守り神）の日で、人も大勢たくさん来ますので、お酒でも飲んでゆっくり語り合いましょう。日が暮れたら、むさくるしい所ですが家に泊まり、今晩もソリの二三も打ってください。」

などと冗談を言いながら鮭や鰰を料理し、氷頭なます（鮭の頭骨を刻んだ「大根なます」）であろうか、囲炉裏の所で作ってくれた。

昼の太鼓を打つころ（お昼の十二時、正午頃）になると、近所の人々が雪沓を重そうに踏んで集まってきた。しばらくすると酔いながら話し合っている。それは次のようなことであった。

「昔からこの村に住んでいる人で、月はじめの二日の日に亡くなることは絶対に無かった。それだから、この日は亡くなった人のために行う精進・物忌み（身を清め行いを慎むこと）もないので、村中の人がみんな出てきて神様（産土神）にお神酒を供え、自分たちもこのように酔うのだ。

月の一日の日に、今にも息が絶えようという重い病の人がいて、医者も、夜の明ける前に亡くなるだろうと言われても、鶏が「カケロ―。」とひと声鳴けば、もはや鶏が鳴いのでこの日は二日の日になったのだ。それならば、今夜亡くなることはない、と心が落ち着くのだ。」という。

ほかの所には例のない、不思議ならわしである。

(一) 獅子が澤のしし石 ― 寛政十年（一七九八）のお話

黒石市上十川の長谷澤上流に、地域の人々から「獅子が澤」と呼ばれている場所があります。そこには、鹿の頭を彫った石があります。地域の人々は古い時代から、その石を「しし石」・その石のある場所を「シシア澤」、と名付けて呼んでいました。

菅江真澄も、寛政十年（一七九八）に「獅子が澤」を実際に訪れてその様子を書いています。その内容のあらましを紹介します。

◆真澄の紀行文

寛政十年（一七九八）七月

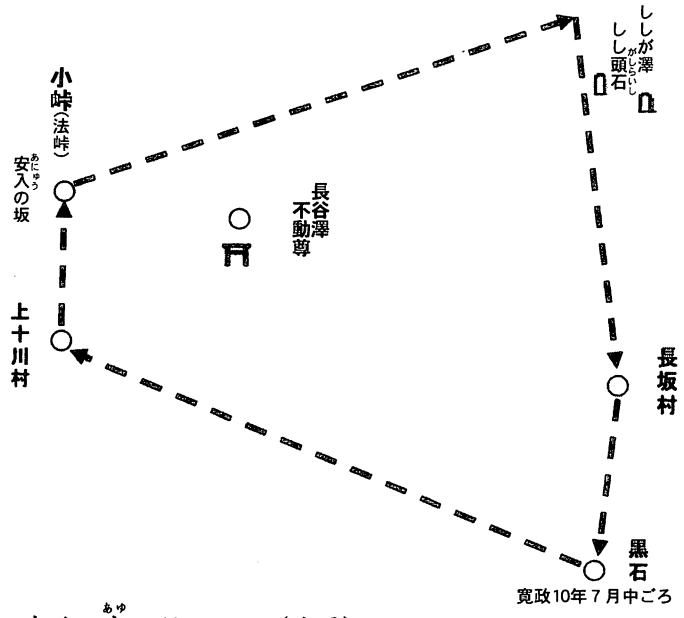
ある年の七月の中ごろ、黒石の里にいて仲間と語り合っているうちに、「ここからあまり遠くない山の奥に『ししが澤』というところがある。そこには不思議な鹿の頭が彫られている石が二つほどある」ということが盛んに話された。

それを聞いて、そうであればそれを見に行こうと吉田、益田などという医者をはじめ、多くの人数で行くこととなった。それで、そこは少々遠いので、その辺りをよく知っている山男（樵。山中に住む人たち）たちに案内してもらおうと上十川という村に入った。

一緒に山道に入ってしばらく進んだ。長谷澤の不動尊の社を右に、左に小峠（黒石市と浪岡町の境）の坂や題目石を眺めて歩き安入という処でしばらく休んだ……。

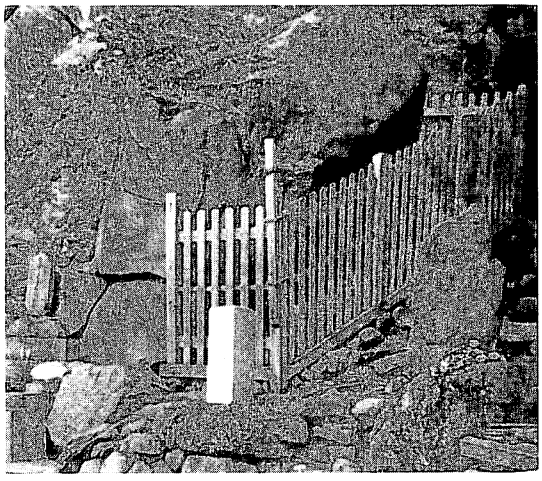
※題目石―お題目「南無妙法蓮華経」が彫られている自然石。

やがて、その山の澤に着いた。通りの傍の道を下り、その岩のところに行くため細い道を進んだ。すると、

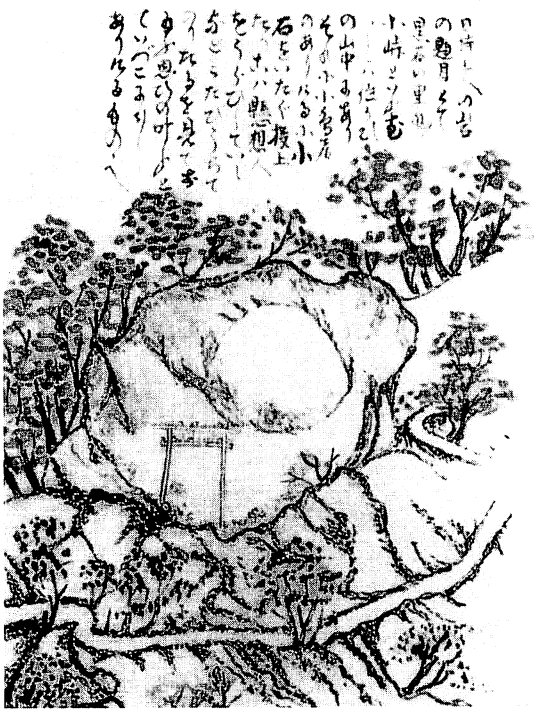


真澄の歩んだコース（略図）

No.3　真澄が書いた長谷澤不動尊、丙－長坂・乙－上十川・甲－黒石、の遠景。
　左上に、「長谷澤不動明王－古懸・中野とこの長谷澤を「三不動」として、一本の木で作られていると伝えられている。」という意味が記されている。



No.5　近年の「題目石」
。題目石―「南無妙法蓮華経」という七字のお題目が刻まれている自然石。そのお題目は、日持という上人（徳の深い僧）が、教えを広めるために通った時、そこにあった大石に書いたと言われている。



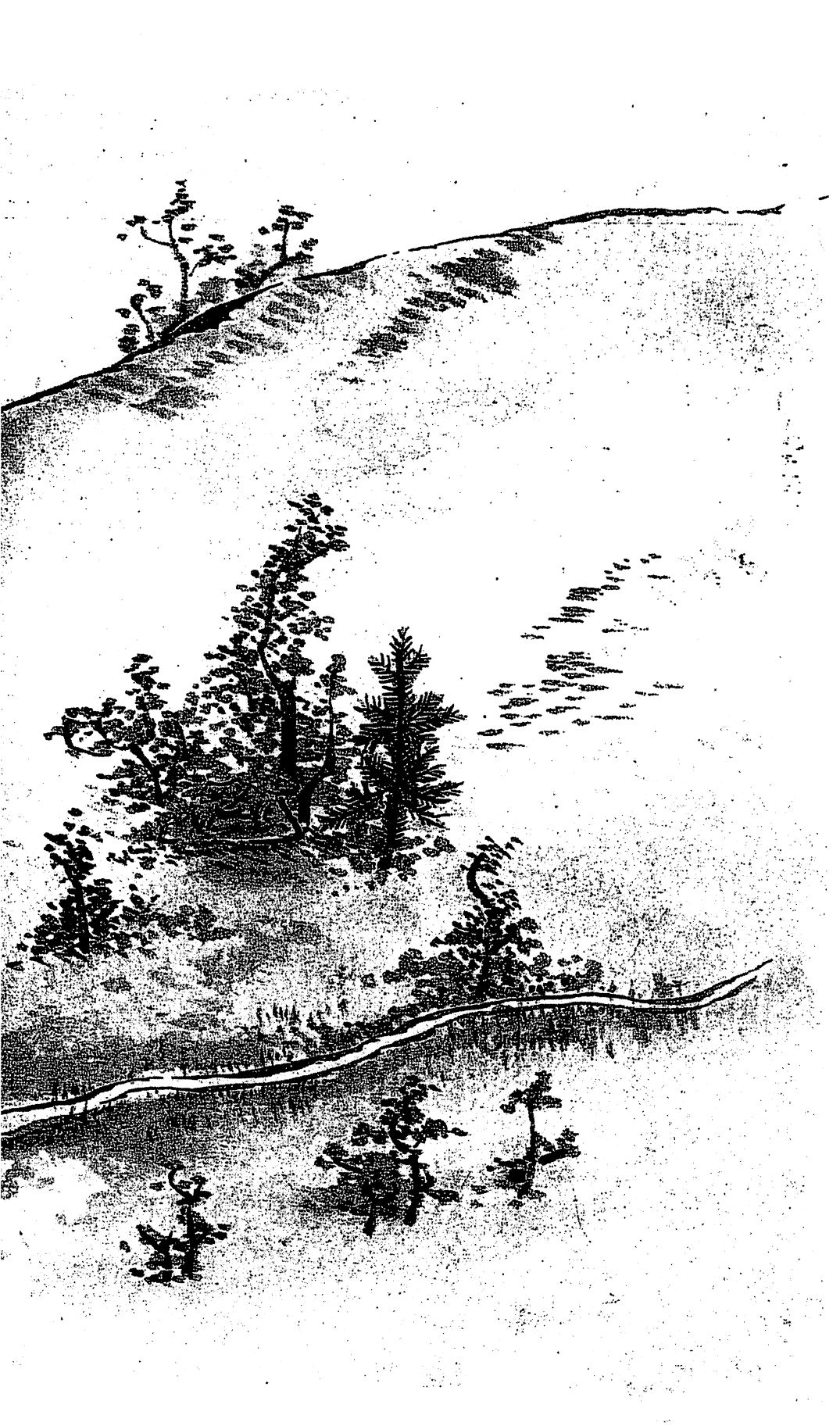
No.4　真澄の書いた「題目石」の状況。題目石の前に鳥居が建っている。

周りが五尋から六尋（約九～十。八メートル）ばかりの岩の表面に、鹿の頭の大きいものや小さいものなど、相当な数がびっしりと彫られている。また、生えている木々の中にある小岩にも同じ鹿の頭形がある。

※尋―昔の長さの単位、両手を左右に伸ばした時の指先から指先までの長さ一尋として基準にしている。一尋は五尺「約一。五メートル」から六尺「約一。八メートル」。

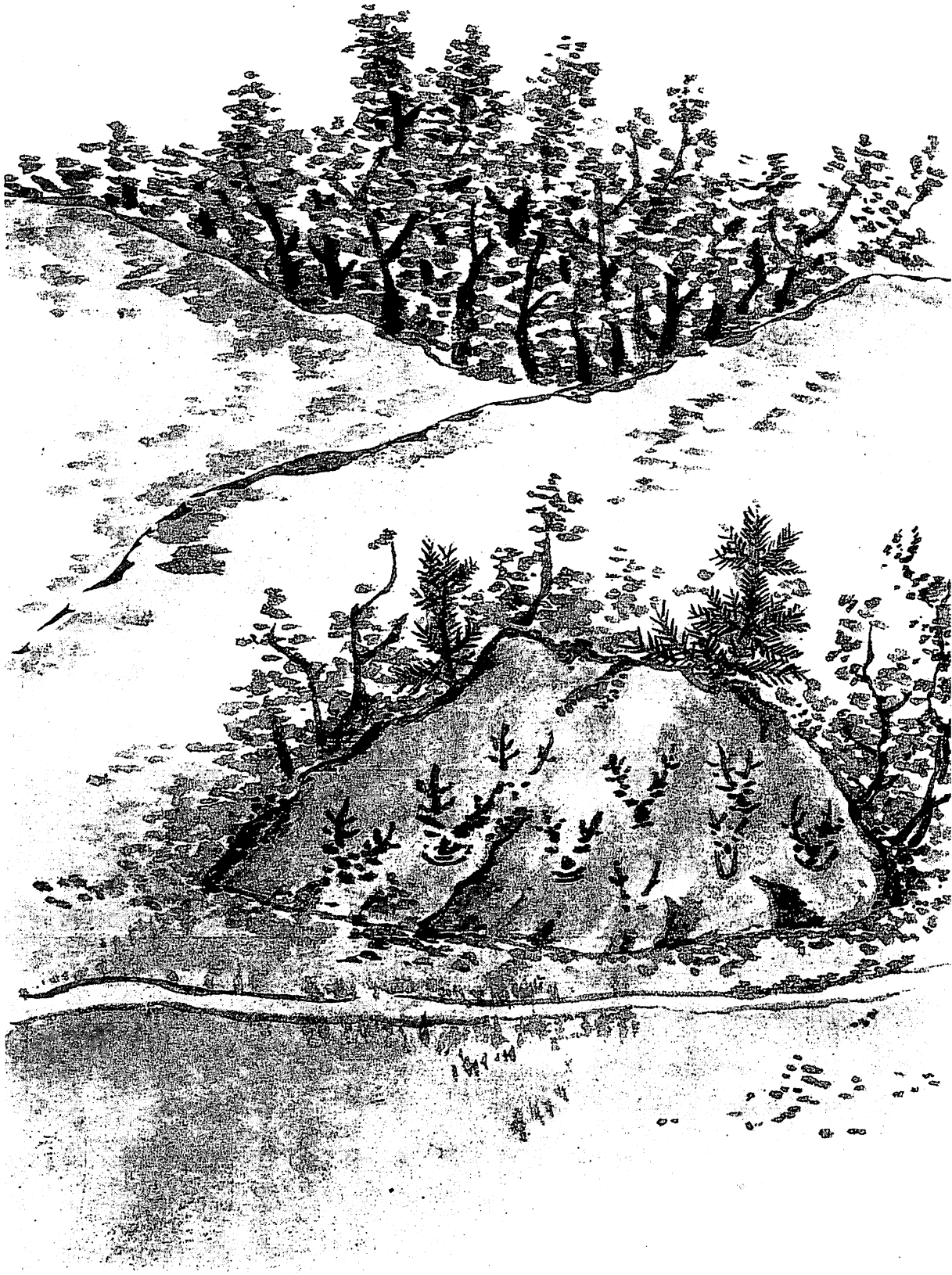
これは、いったい誰が作ったものか、いつの世からあったものなのか、ということは何も分かっていない。ただ、神が行われた技であり、いつも七月七日ごとに、必ず二つを彫って添えるとも言われている。

そのわけについては、ここから近い村々の鹿踊りで用いられる獅子頭も、長年舞い



No.6

真澄が書いた「鹿頭(しかがしら)を刻(きざ)んだ岩」



No.7　真澄が書いた「鹿頭を刻んだ岩」

続けると古びてくる。その古くなった獅子頭をこの岩の周りを掘って埋めたのだという。そのことのほかにはまったく思い付かない、と一緒に来た山男たちが話した。

いかにも、鹿子頭の彫ってある姿を見ると、おろそかに彫り作ったものとは思われない。吾田多良山に臥す獅子の頭を祀ったのであろうか。

※吾田多良山―福島県中部にある火山で、日本百名山に選定されている「安達太良山」のことと思います。連峰には安達太良山明神（主峰安達太良山）箕輪権現（箕輪山）、鬼面骨明神（鬼面山）など、山の名前と祀られた人にかかわる伝説が残っています。

真澄は、その山に伝わって獅子頭（権現様）のことを記したのではないでしょうか。

観察を終えた真澄は、長坂村に出て黒石に帰りました。菅江真澄のこのような記録を確かめることにより、「獅子が澤の獅子石」は寛政十年（一七九八）よりも以前の年代からその場所に存在していたということが判明することになります。

(二) 獅子が澤のしし石 ― 昭和六年（一九三一）のお話

「獅子が澤の獅子石」については、昭和の年代に入っても、その場所や「獅子石」の状況や地域に住む人たちの言い伝えなどが興味深く調査され記録されています。それだけその存在に大事な価値を認めているからだと思います。

佐藤耕次郎さんという方が、昭和六年（一九三一）に著した「浅瀬石川郷土志」という本に、「獅子ア澤の獅子石」のことが述べられていますので、そのあらましを紹介します。

☆ 浅瀬石川郷土志（佐藤耕次郎著作）より

……長谷澤の中に入って、獅子ア澤と言われている浅い小さな澤を分けて入れば、山路（山の道）の傍に謎の石が二つある。一つは、高さ三尺一寸五分、幅五尺五寸。もう一つは高さ五尺五寸、高さも五尺五寸のものである。いずれも天然石である。

※分・寸・尺―昔の長さの単位。十分で一寸、十寸で一尺、一尺は約三十三センチメートル・三尺三寸で約一メートル。

大きな石の面には、直線記号をつづり合わせたもので鹿の面に見えるも

のが三つある。いずれも二本の鹿の角を生やした鹿の面とも、獅子の面とも、鬼の面とも思われる大形のものである。三体とも同じ形ではないが、いずれも鹿の角、目、鼻、口に見えるものは付けられている。右の三面の右の場所に、小形の彫刻が数個見られる。鹿角の彫刻の深さは上の方にあるものは一寸（約三・三センチメートル）もあり、石の面全体に苔が生えた上からでも形の見分けがつく。

大きな石から、上の方へ二十間（約四十メートル）ばかり離れ小さい方の石がある。これにも二個の形が見えるが、大きな石のものよりも彫った溝も浅く形も小さい。鹿角は割合に小形で、顔の部分は比較的大きい。……左の方にある形はやや鬼の面のように見えるが、右の方にあるものは線や印しの寄せ集めであって顔の面には見えない。

※間――昔の長さの単位。一間は六尺、約二メートル。

この石の彫刻は、次第に削られていっており、形が分からなくなりつつある。しかし、左の下の方に「上十川村」と刻まれている字はよく現れている。でも、この字が当時のものであるのか、後の世に刻まれたものなのか、ということはよく分からない。二つの石は昔から有名なもので、古い書物にも書かれている。また、二つの石に関する説話（人々の間に語り継がれ

ていくお話）も生まれている。

この地域の人たちは、この彫刻を否応なしに獅子の面としてみなして、石を「獅子石」と名付け、澤を「獅子が澤」と呼んでいる。

獅子というのは獅子踊の衣装の獅子頭を指すので、一般に言われる獅子コ面である。獅子コ面の角は単角（一本角）であり口は大口であるが、石に彫られている獅子の面は鹿の角であり、口も小さくしているところに違いがある。

老爺の図

地域に住んでいる人から、獅子石に関係のある物語を聞きたい思い、地元の六郷村長坂の部落に行ってみた。ちょうど村はずれの辺りに農家があった。

そこで、年齢が八十歳余りと思われる老爺が、春の暖かい日の中で家の外の台石（土台として置く石）に腰をおろしていた。いつも身の頼りとして使っている杖の頭に両手を乗せ、さらに顎もそれにゆったりと乗せて、ホロホロと散る山桜

の花を眺めていた。

自分はあまり長くない命だ。この山桜の花が散っていくように、自分もこの花の運命を追ってあの世に参らねばならないと悲しんでいるのか、それとも、散っていく花びらを見ていて眼が疲れてしまったのか、ときどき眠っては眼を開き、眠っては眼を開く……。その様子は全く詩人の黙想（黙って考えにふけること）にも似ている。

私（佐藤耕次郎さん）は「爺さまぁ。」と呼びかけながら近寄っていった。突然の私の声に、ちょっと驚いたように赤い縁をした眼を大きく開き「ハーエ。」と軽く返事した。

「お前さんは達者で何よりだね。若い時には随分と働いたようだね。」と慰めの言葉をかけると、低い声で「ハイハイ。」と、頭を縦に動かした。それからいろいろな話をしながら、獅子石のことについてどんなことが伝えられて来ているのかを聞いた。その老爺は話した。

「自分がまだ子供のとき、七十歳ほどの年寄りから次のような話を聞いたもんだ。

『獅子ア澤の獅子石の前で歌を歌うと、削られた獅子コがひとりでに踊るそうだ。また、時には獅子自身が笛や太鼓で囃しながら獅子歌を歌うの

が聞こえることもある。』

という話だ。しかし、自分は未だそれを聞いたことがない。

昔、その年寄りたちも知らない昔のことだが、獅子踊りがお上（その土地を治めている役所）から禁じられてしまった。そこで、村々の人たちが、みな獅子衣装を箱に入れてしまった。年に一回は、必ず箱から取り出して踊るという『獅子起こし』をしないで、それっきり箱から出さなかった。

何年も『獅子起こし』に逢わなかったので、世の中が恋しいと思うあまり、その箱を内側から鳴らして困ってしまった。それでは気味が悪いというので、村では『こっそり起こそうか。』と言い出す者もあった。けれども、お上のお咎めも恐ろしいというので、いっそのこと、そのまま山へ埋めてしまおうと相談が決まった。

そこで、その獅子衣装を村の奥地に当たる今の石の所に埋めたもんだ。ところが、よくよく今の世の中を見たいものとみえて、埋められた獅子コが石の面に現われている。今に見えているのは、それである。と年寄りたちは話した。」

このような話になると、老爺は閉じる眼も閉じないで熱心に語るのであった。

このことから考えても、昔、獅子踊というものがそれぞれの村々で熱心に行われていたことと思う。六郷村十川では、今日でも獅子踊が名物となっている。

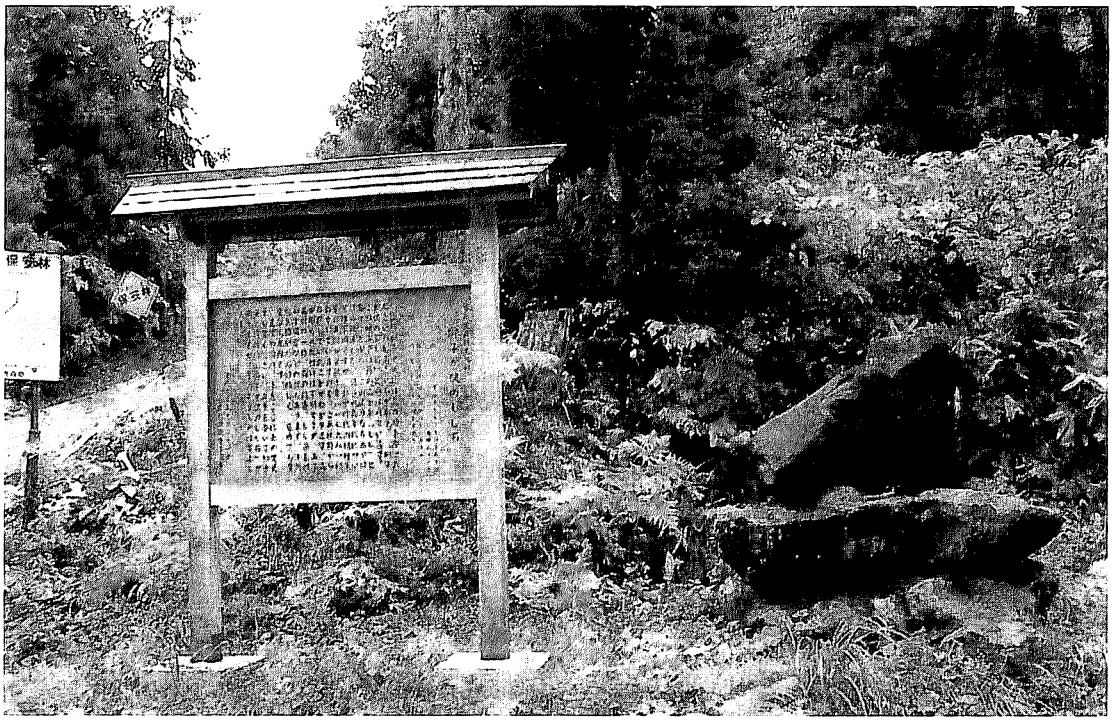
また、古くから山形村の中野（現在の黒石市南中野）では、「中野の獅子」と呼ばれて地方の名物になっていたのだが、今はなくなっている。

長谷澤の「しし石」や「獅子頭・獅子踊」のことについて、寛政十年（一七九八）菅江真澄が実際に見たり聞いたりしたこと、さらに、それから一七三年後の昭和六年（一九三一）に、地域の歴史について調査したり研究していた佐藤耕次郎さんという人が述べたことを紹介しました。

そういうお話の内容を考えると、とても不思議な思いがいたします。

(三) 現在の「獅子が澤のしし石」――市指定民俗文化財

現在も、「しし石」は長谷澤にあります。大きい石と小さい石があります。大きい石に八頭分の鹿の頭が彫られており、小さい石には二頭分の鹿の頭が彫られています。とても珍しいので、黒石市の民俗文化財に指定されています。

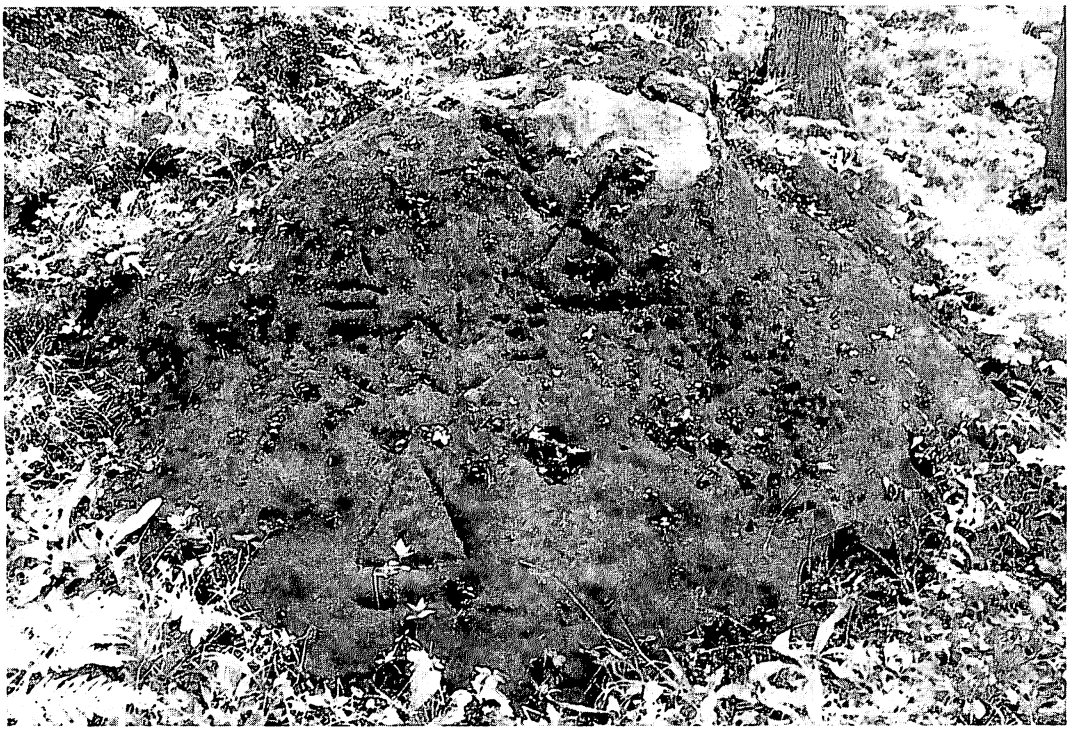


説明板「獅子が澤のしし石」

（「獅子が澤のしし石」
黒石市民俗文化財　指定　昭和六十二年一月十日）
「しし石」の少し手前にある説明板には、

通称（ふだんよく言われている）獅子が澤には鹿の頭を彫った大きい石と小さい石があり、「獅子が澤のしし石」と呼ばれています。この地方では鹿のことを「しし」と言うことから、このような名称が付けられました。造られた年代については不明ですが、江戸時代の紀行家菅江真澄が寛政十年（一七九八）に紹介していますので、これ以前から存在していたことがわかります。鹿が彫られた理由は不明ですが、山子芸術の一種、鹿の供養、し頭を埋める風習などの説もあります。また、絵を描いた石は珍しく、県内でも貴重な文化財です。

現在の「獅子が澤のしし石」



現在の「獅子が澤のしし石」

現在の「獅子が澤のしし石」

というように紹介されています。

前に述べた菅江真澄の寛政十年代のお話や佐藤耕次郎さんの昭和六年代のお話との関係が受け止められますし、昔行われていた獅子踊（鹿獅子踊）との繋がりにも思いが及びます。

また、周辺の地域では現在も獅子踊の行事が続けられています。現在行われている獅子踊の伝承内容（言い伝えられてきている内容）にも深く関係してくる事柄ではないでしょうか。

六　二双子の「だげぐら」――現在の行事（民俗芸能）

三章・五章で、獅子頭・権現様・獅子踊・獅子石に関わることを述べました。獅子踊の行事も、代々続いて行われる地域もあれば、行われた跡が残されていないところもあるようです。

また、伝統を受け継ぎ、獅子頭やマク（装束）を用いて、その地域独特の行事が続けられてきている場合もあります。

今回はその一つとして、現在二双子で行われている「災いを祓って幸せを招くため、獅子頭を捧げて町内の家々を巡回する行事」の様子をお知らせしたいと思います。

菅江真澄の紀行文、寛政七年（一七九五）十一月二日の内容の中に「月初めの二日に、二双子村では『産土祭り』が昔から行われていた。」ということが書かれていることを述べました。（十六頁〜十八頁）

現在の二双子の伏見神社の大祭は、毎年五月・八月・十二月に行われます。年に三回ですが、期日はいずれも月初めの二日の日に行われています。

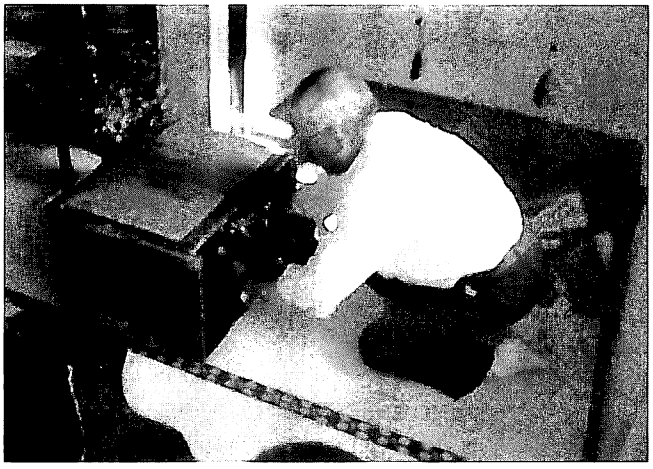
その内八月二日には、太夫の先導で「獅子」が二双子町内全ての家々を回ります。獅子の役は、マク（獅子装束）の中に獅子頭役のほか胴体役三人、合計四人が入って演じます。太鼓の囃子で巡回し、獅子頭（獅子）の動きによってその家の「災いを祓い、豊作や日々健康で過ごせるよう祈願（お祈りしてお願い）する」という行事です。昔から行われてきている行事で、二双子の人々はこの行事のことを「だげぐら」と呼んでいます。

そして、地域の人々は、この行事に用いられる獅子頭のことを権現様と呼んでいます。

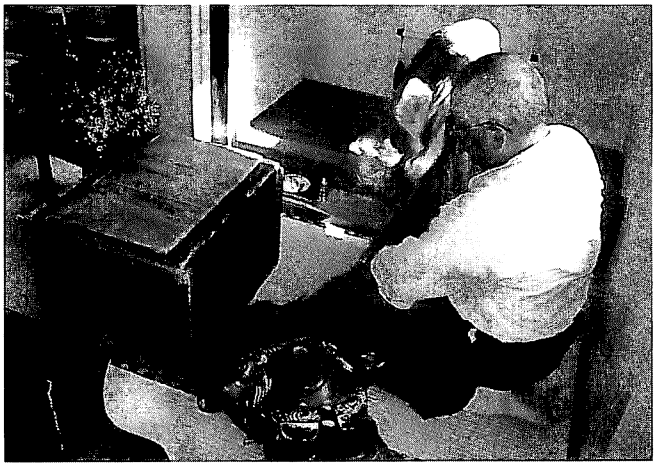
それでは「だげぐら」の様子を、実際の写真を活用しながら紹介します。

(一) 開催の準備

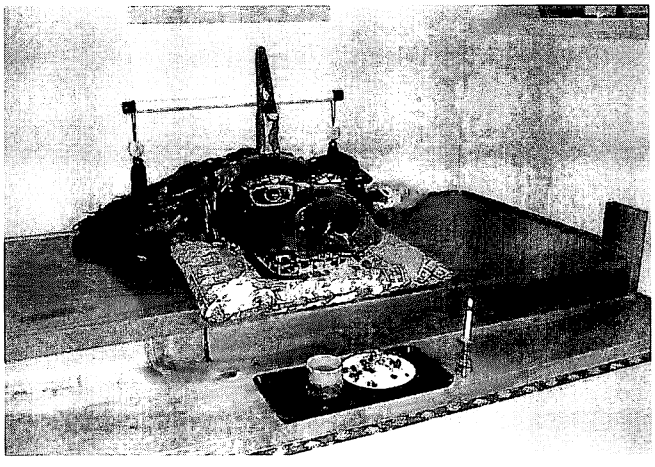
★ 獅子頭のお清め



1. 八月二日朝、高田正志さん（二双子の伏見神社責任総代）が、保管している獅子頭を箱から出してお清めの準備。

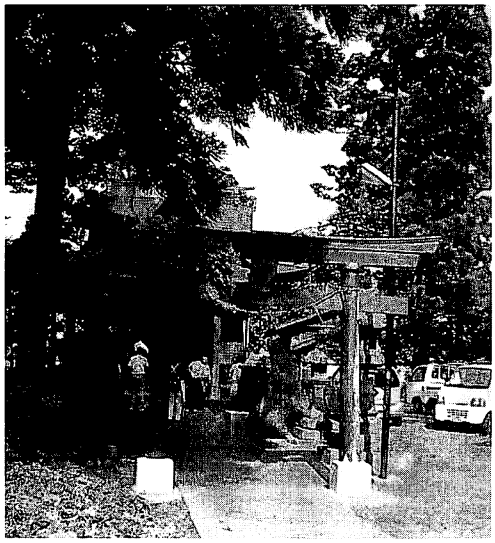


2. 獅子頭をきれいにしてから、「獅子の役」が被るマク（麻布）の状態も確かめる。

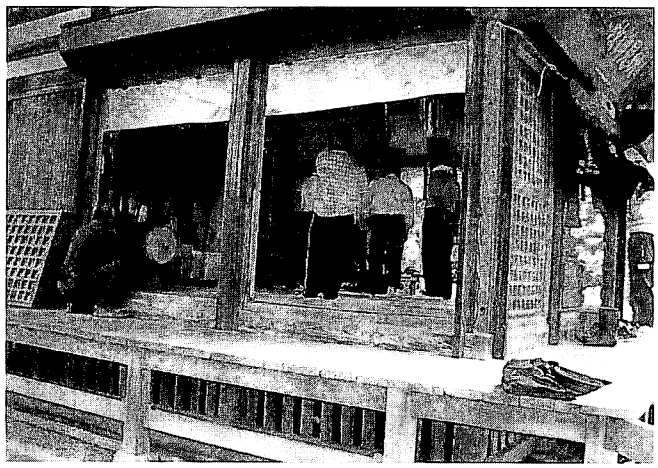


3. 「獅子頭」を座敷の床の間に丁寧に据え置き、火を灯して赤飯とお神酒をお供えする。

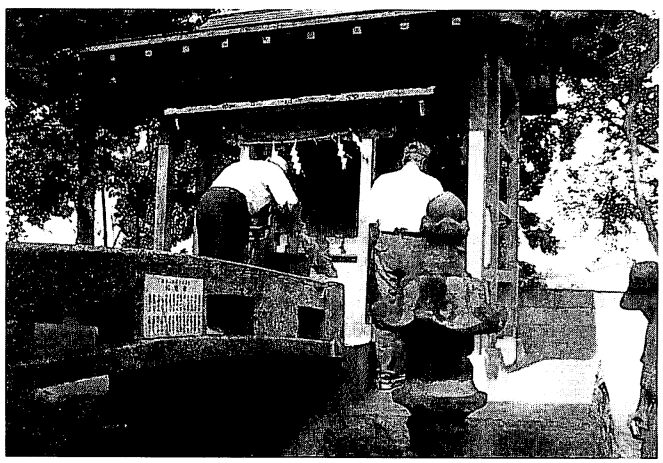
★ 人々が二双子伏見神社で行う準備



4. そのころ、二双子の人たちが町内の「伏見神社」に集まっている。

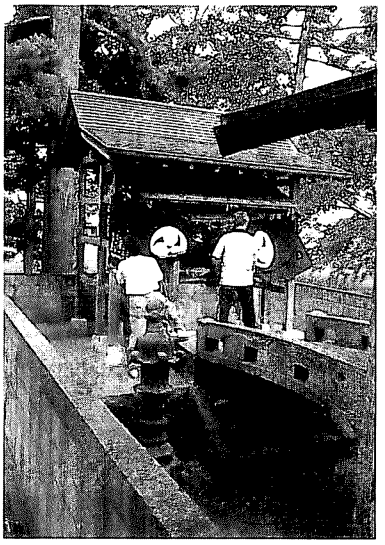


5. 拝殿をきれいにお掃除。

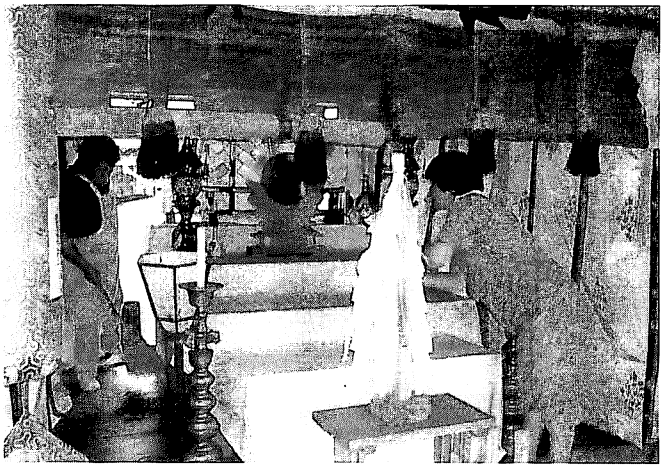


6. 「奥の院」も丁寧にお掃除し、

7. 「奥の院」正面の装いも、念入りに。



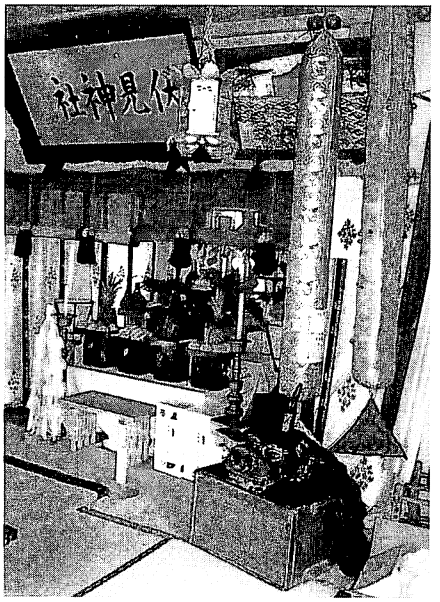
8. 拝殿内―お供え物の置き場所―祭壇づくり。



9. 拝殿内―お供え物の準備。

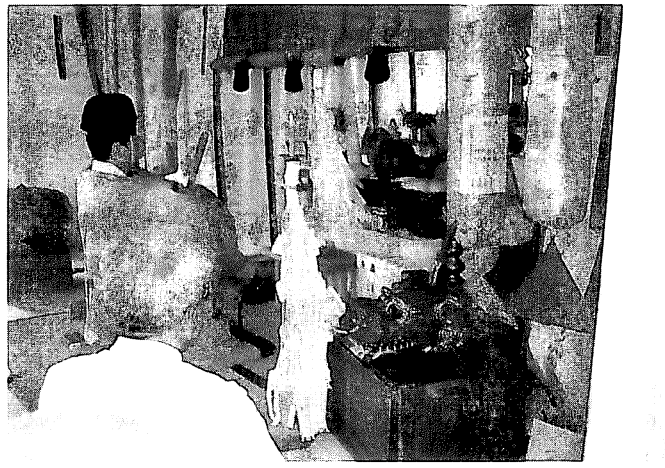
10. 獅子頭を拝殿の中に運び入れる。

11. 拝殿内――神前に「獅子頭」・「ご幣」を置く。

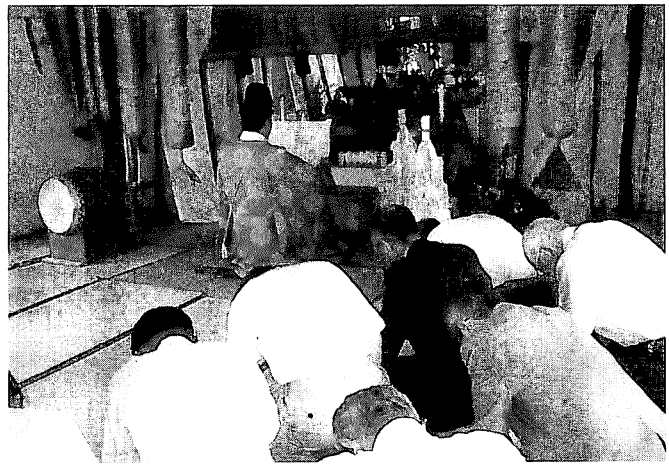


12. 準備が終わり、氏子の人々が席に着く。

(二) 神前に「獅子頭」と「ご幣」を置いて祝詞を奉ずる



13. 宮司が席につき神事が始まる。



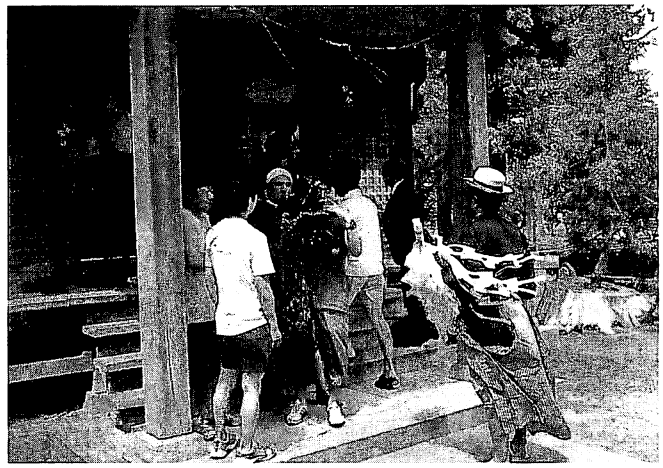
14. 宮司が祝詞を奉ずる。

15. 獅子を先導する太夫が祈る。

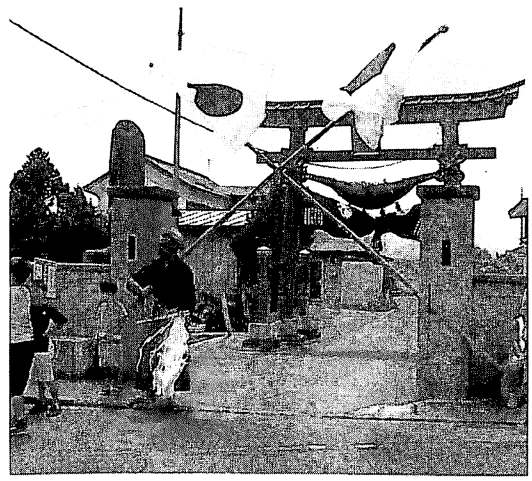
○ 二双子では、獅子を先導する人を太夫と呼んでる。太夫は和服で袴をはき、顔に八の字の髭をつけて、獅子より先に家を訪問する。家の中に入ると携えてきた「ご幣」でお祓いをする。

○ その後に、獅子頭（獅子）が続いて家に入り、お祓いをしていく。

(三) 獅子（獅子頭）の町内回り



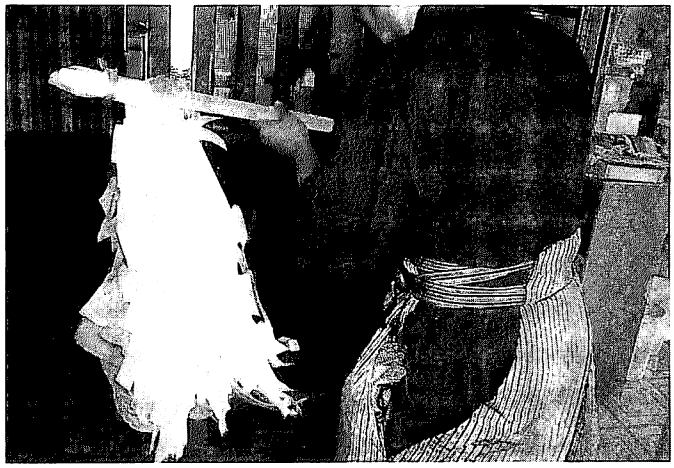
16. 神事が終わり、「太夫・獅子の役」出発の準備――獅子頭役のほか三人、合計四人の「獅子の役」を務める青年たちも獅子頭の動かし方なども確かめ、町内回りの準備に入る。



17. まず、太夫が先に神社を出発する。

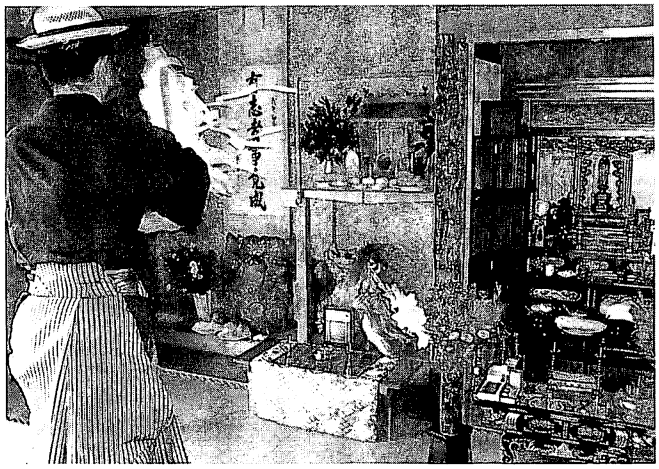
18. 続いて、「太鼓囃子」と共に獅子が出発。

19. A宅—太夫が玄関に入ると家の人がご挨拶して迎える。

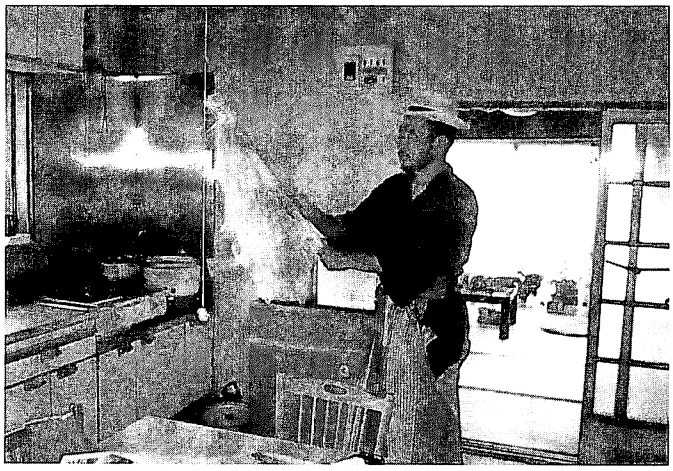


20. A宅—居間をご幣でお祓い。お家の人も真剣に見守っている。

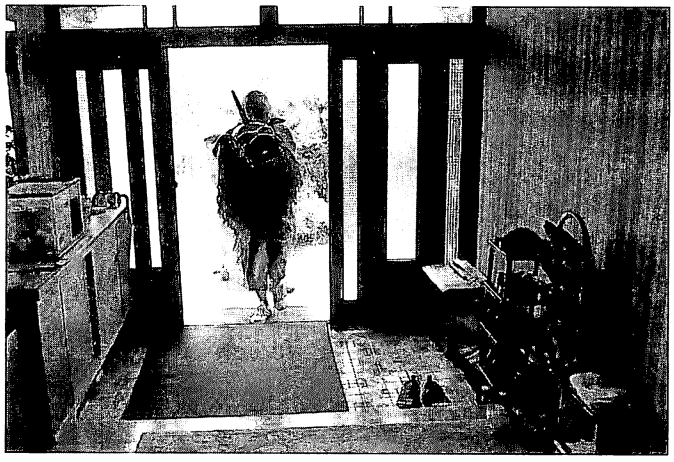
21. A宅—台所をお祓い。



22. B宅—仏壇・神棚のお祓い。床の間には、お供え物をして、太夫や獅子頭を迎える準備がしてあった。

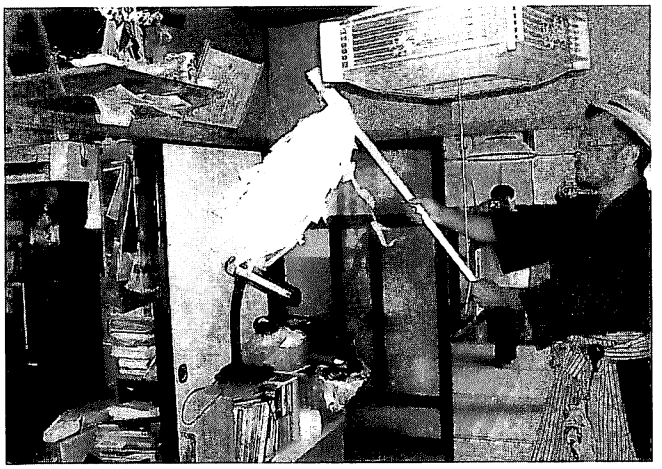


23. B宅—台所をお祓い。

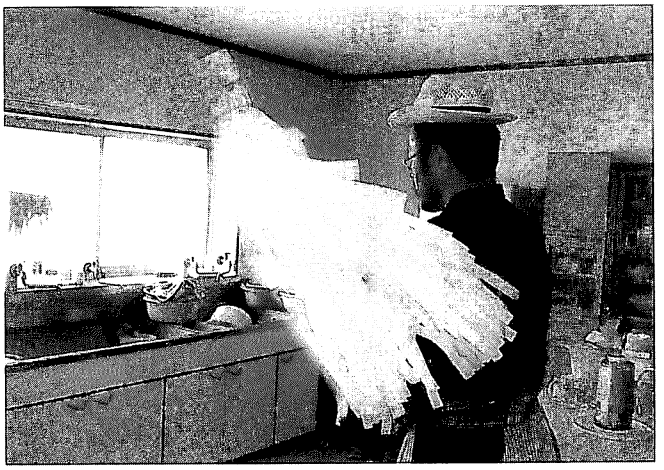


24. B宅—太夫がお祓いを終えて出て行った後、玄関から獅子が入る。

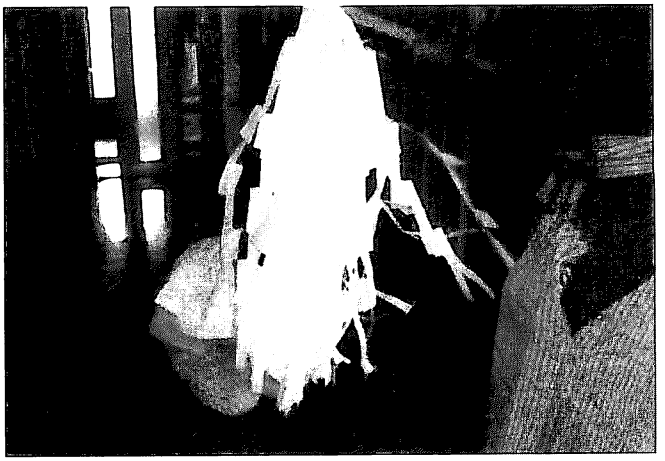
25. C宅—神棚(かみだな)をお祓い。



26. C宅—台所をお祓い。

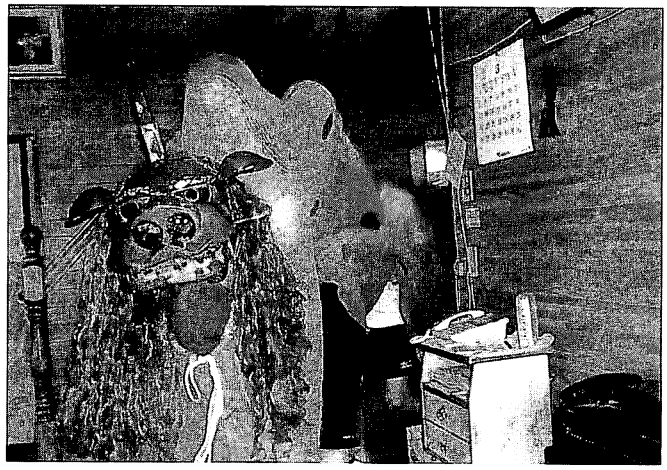


27. C宅—出ていく太夫にご挨拶(あいさつ)。

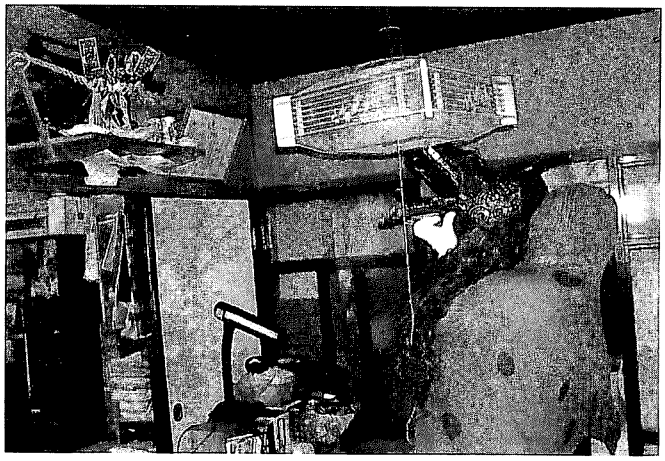


28. C宅―入ってきた獅子にご挨拶。

29. C宅―家の中を舞い歩き、神棚へ向かう。



30. C宅―神棚の前で口を大きく開閉し、獅子頭を振るってお祓いする。



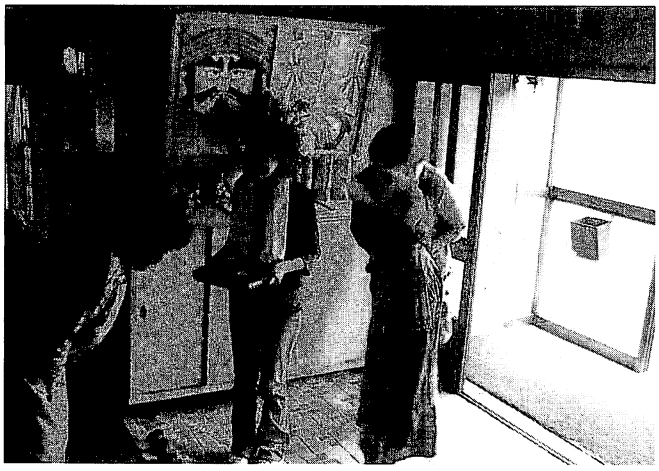
31. C宅—台所で口を開閉。獅子頭を振るってお祓いする。

32. D宅—神棚。台所のお祓いの後、奥様の頭を軽く噛む。

昔は、体の具合の良くない所をなおしたいため、そこを獅子頭に噛んでもらい、お祓いをしてもらうことがよくあったという。

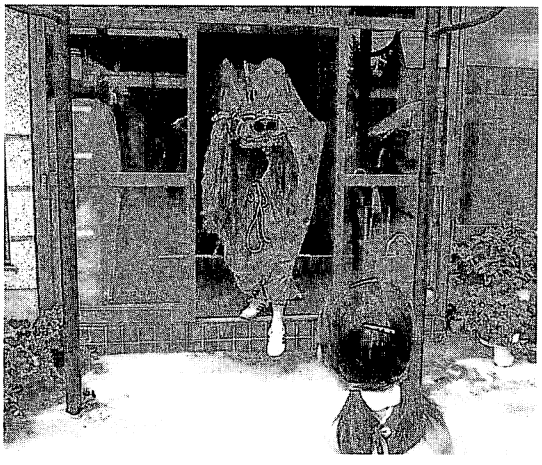
33. D宅—お祓いが終わって獅子が帰ると、

34. D宅—獅子頭の付き添いにお礼。



35. 太夫や獅子が家のお祓いをしている間も、太鼓囃子は休みなく続けられる。

36. 獅子が家中のお祓いを終え、

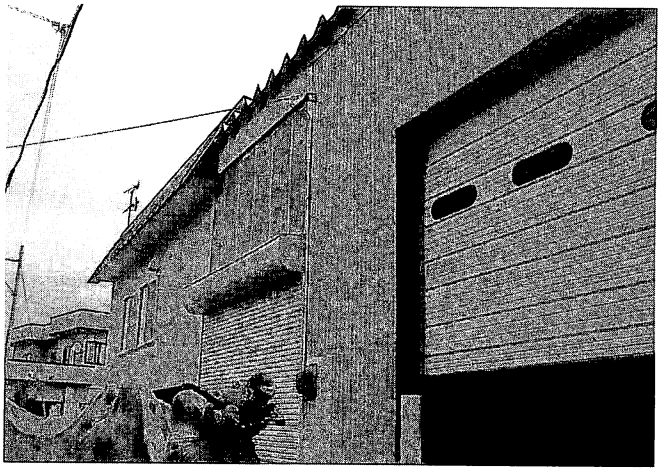


37.

次の家に向かう。

38.

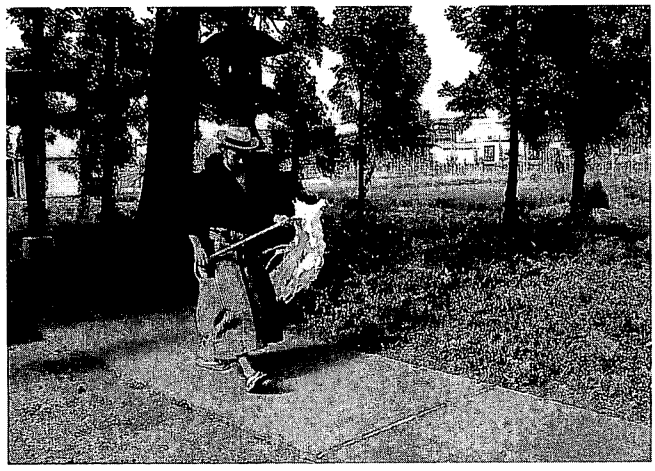
その途中、工場などの建物がある場合は、入口前で獅子頭の口を開閉してお祓い。



39.

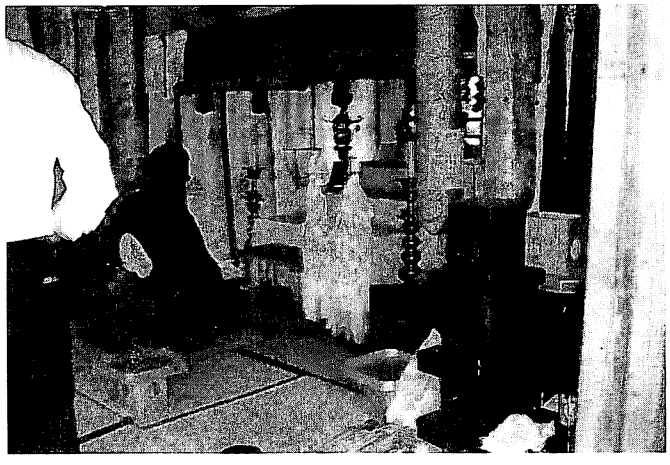
二双子全部の家のお祓いが終わると、獅子が太鼓囃子と共に、伏見神社の鳥居の所に帰ってくる。

(四) 町内回りを終えて



40. その先に、太夫が鳥居をくぐって神社に向かっている。

41. 神社の拝殿に入り、

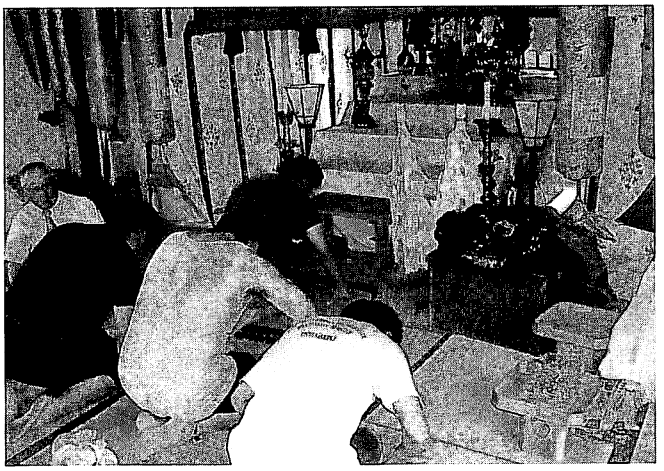


42. 用いた「ご幣」を神前に置き、報告のお祈りする。

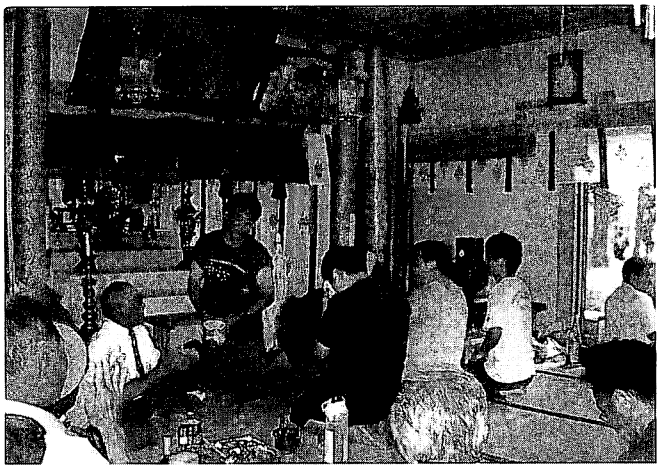
43. 続いて獅子が鳥居をくぐって帰ってきて、

44. 拝殿に向かう。

45. 拝殿に入り、獅子の役四人は、獅子頭やマク（麻布）を脱ぎ、

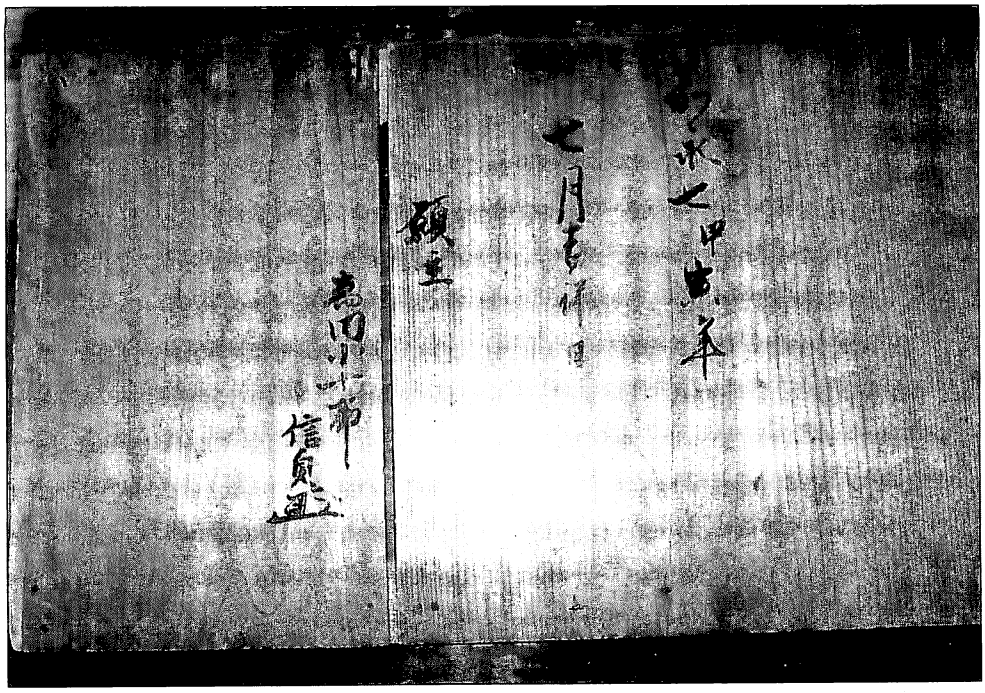


46. 獅子頭を神前に置いて、町内巡りが終了したことを報告し、町内各家庭の豊作・安全をお祈りする。



47. 大事な役目を果たした獅子役さんたちの努力をねぎらい、「ご苦労様」と大きな拍手。

48. 活動が全て終わり、太夫・獅子役・氏子のみなさん、全員で楽しい語り合い。



★ 獅子頭を納める。

その後、町内の家々をお祓いした獅子頭は、箱に納められ大事に保管されます。

獅子頭を入れて保管しておく木製の箱の「ふた」には、

嘉永七甲寅年
七月吉祥日
願主
高田小十郎
信貞（花押）

と毛筆で書かれています。

- 嘉永七甲寅年（江戸時代末の年号）
- 七月吉祥日（七月のとてもめでたい日）

・願主（制作をお願いした人）
・高田小十郎（高田正志さんのご先祖）
・信貞――花押（花押――自分が書いたことを証明する記号）

このことについて、高田正志さんから次のようなお話をお聞きしました。

高田さんのご先祖は、代々「小十郎」という名前を受け継いで名乗ったそうです。（昔の習わしで「襲名」と言われている。）

現在行事に用いられている「獅子頭」は、高田家のご先祖が二人のお供をつれて京都まで出かけ、工匠（細工・工作を職業としている人）にお願いして制作してもらったということでした。

そのことは、高田さんが自分の祖父から直接に聞いたお話だそうです。

そして、「獅子頭」を作った工匠の名前は、恐らく箱の「ふた」に記されている「信貞」という人であろう、ということでした。

箱の「ふた」に書かれた「嘉永七甲寅年」の「嘉永七年」は西暦一八五四年に当たります。

※甲寅――昔、年や日を表すために十干（甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸）と十二支（子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥）を組み合わ

せる方法を用いた。十干を五行（木・火・土・金・水）にあてはめ、さらにそれぞれを「兄」と「弟」に分け、十二支に配する方法が行われた。その方法で年を表すと六十通りの組み合わせができる。それを六十回ごとに一周する暦として用いた。「甲寅」はその中の一つ。

※嘉永から安政へ――嘉永七年の十一月末に「安政」という年号に変わります。それで安政元年も甲寅年・西暦一八五四年として示されています。

そのことから、二双子で用いられている「獅子頭」は、今（西暦二〇一〇年）から一五六年ほど前に制作されて用いられてきていたのではないか、と考えることができます。二双子で「だげぐら」が行われるようになってから、かなり長い年月がたっていると思います。そして、毎年、休みなく繰り返され続けられてきています。

それは、昔の村人たちが、家々の災いを取り除きたい。豊作を望みたいを初め、心の奥に秘めた願いを獅子頭に祈り、自分たちの生活を守ってもらおうとしたことが基になっていることでしょう。

また、現在「だげぐら」を八月の月初めの、二日に行っている二双子町内の人々たちの心の中にも、そのことが生きているのではないでしょうか。

七　上十川の獅子踊――県無形民俗文化財

(一)　獅子踊の歴史について伝わっているお話

上十川の獅子踊の伝承（言い伝えられていること）についてお話します。

昔、浅瀬石にお城がありました。お城のあった頃は「汗石」でした。「浅瀬石」が用いられるのは万治二年（一六五九）頃からですが、お話は「浅瀬石」を用いて続けます。

永禄四年（一五六一）頃から天正十六年（一五八八）のあたりまで、千徳大和守政氏という人が浅瀬石城十代目の城主でした。

その千徳政氏が城主だった時代に、南部の方からやって来たという六郎右衛門という人が浅瀬石川の川原に住んでいました。六郎右衛門は獅子笛を吹くのが好きで、毎日吹いていました。いつもその音色を聞いていた愛宕の住職が、中野不動尊に納める獅子を作ってくれるように六郎右衛門に頼みました。

※昔、山形村の中野にも獅子があり「中野の獅子」と呼ばれて地域の名物になっていたことを「獅子が澤のしし石」のところ（三十二頁）で紹介しましたが、

そのこととの繋がりが考えられる内容ですね。

六郎右衛門は早速引き受け、千年木の桐の切り株を用いて一揃いの獅子を作ってあげて、囃子の仕方も教えました。

そのことを聞いた浅瀬石城主の千徳政氏も、六郎右衛門に一揃えの獅子を作ってもらうことを望みました。城主からお願いされた六郎右衛門は、制作の取りかかりから仕上がりまで念入りに行いました。六郎右衛門が、完成した一揃いの獅子を城主の千徳政氏に納めたのは、天正十二年（一五八四）の時期と伝えられています。

仕上げて納められた一揃いの獅子を見た千徳政氏は、その出来栄えに感心しました。浪人（仕える主人を持たないで暮らしている人）であった六郎右衛門を家臣に取り立て、川の砂のある場所に住んでいたことから品川の姓を名乗らせました。それから、品川六郎右衛門は千徳家の「抱え獅子」として舞を完成させました。

従ってその頃は、中野不動尊の「抱え

獅子」が「姉」、浅瀬石の「抱え獅子」は「妹」とみなされ、人々にふりかかる災いを祓うために「姉・妹の獅子踊」がそれぞれ行われていました。

ところが、浅瀬石城は政氏の後を継いだ十一代城主千徳政保の時代・慶長二年（一五九七）二月に、津軽為信によって攻め滅ぼされてしまいました。そして、城主の千徳政保も戦死してしまいました。

※浅瀬石城や城主であった千徳家が盛んだったころや滅んだ状況について、「わたしたちの黒石」第三集の四十八頁〜六十九頁に述べましたのでご覧下さい。

千徳家が滅んでから、獅子は村人によって保存されてきましたが、天保元年（一八三〇）七月八日、野際村に移されました。しかし、野際村では獅子踊を長く続けていくためは難しい状況もありました。

ある年、上十川では古くなってしまった獅子を獅子森へ埋めたことがありました。その後、およそ十年くらいたった頃に、村全体に悪疫（悪性の病気）が流行してしまい、人々は大変困りました。

そして、こういうことになったのも、身にふりかかる災難を祓ってくれる獅子を埋めてしまったからだと考えました。

それで上十川の人々は、明治七年（一八七四）四月二十七日に野際村から獅子を譲り受け、太鼓や笛などで囃子をつけて獅子踊を行いました。

※その時に力を尽くした人として、先導者の村上助左衛門（庄屋を務めた人）や、花田長吉・高橋又兵衛・後藤喜助・村上三郎・村上喜太郎・高橋又兵衛・宇野巳之などの名前が伝えられている。

そうしたら、村中に広まっていた悪疫は、跡形も無く消えてしまいました。

上十川の人々は、その恩に報いたいと思い、明治十八年・十九年、二年の歳月をかけて長谷澤不動尊の拝殿から奥の院までの石段を作って奉納しました。

それから、上十川の獅子踊は凶事退散の舞（悪い出来事を立ち去らせるための舞）として受け継がれてきました。

以上のような内容が、言い伝えられてきているお話になると思います。獅子踊が伝わってきたその歩みがよく分かるお話だと受け止めることができます。

獅子踊の歴史を考える上で、さらによく考えてみたいことは「長谷澤の『しし石』」の存在と地域の人々の昔の生活実態との関係です。民俗芸能の発生や伝承には、その地域に住んでいた人たちの生活と心が反映するも

のと思うからです。

「長谷澤の『しし石』」のところの「説明板」には、

・「獅子が澤」周辺の地域では、昔、「鹿」のことを「しし」と呼んでいたこと。

石になぜ鹿が彫られたのかということは未だはっきり分かっていないが、そのわけとして考えられている三つのこと（説）として、

・山子（きこりなど山で働く人）芸術（ある材料を使って美を表現したもの）の一種であろう。

・鹿を供養（死んだり殺したりした鹿を弔い・祈り）するために彫ったものであろう。

・しし頭を埋める風習（その地域の生活や行事のならわし）があって彫られたものであろう。

などのあることが紹介されていました。

いずれにしても、そのようなことが発生していく暮らしが、実際に行われていたことが把握されれば、「しし石」と獅子踊の関係も、より深い意味を持ってくることと思います。

民俗芸能の伝承を考えると、その地域に発生したある種の芸能がそのま

ま地域の伝統文化として続いていく場合もあれば、長い年月の過ぎる間に、他の地域から伝わった芸能と同化（異なるものが影響しあって一つになってしまう。）して、さらに地域性豊かな内容となって受け継がれていくことも考えられるのではないでしょうか。

(二) 獅子踊の行事

現在、上十川の獅子踊は、旧暦の八月八日に長谷澤神社で行われる「獅子起こし」から始まり、旧暦八月十五日の上十川八幡宮で「獅子納め」が行われて終演になります。その期間、上十川の地域で踊られています。

獅子踊は、獅子と囃子から成っています。囃子手は、笛を吹く人・太鼓をたたく人・天平鉦を鳴らす人・謡いの人。踊り手には、オガ獅子（動きを導く役で、「オガシコ」とも呼ばれていて翁の面をつける。）・牡獅子・中獅子（牡）・牝獅子・山持ち（笹を山に見立てる人）などの役があります。

★ 踊りのおよその内容は、

☆ 一頭の牡獅子が牝獅子を隠したので、もう一頭の牡獅子が怒ってしまい格闘（戦い）になる。

☆ 格闘して負けた一頭の牡獅子が、気絶して倒れてしまう。それをオ

ガ獅子が介抱し励ましてあげる。その獅子は気を取り戻し、勝った牡獅子と再び激しい格闘を始める。

☆　その様子を見ていた牝獅子は、その争いを嫌い、一株のススキの影に姿を隠してしまう。

☆　オガ獅子は、隠れている牝獅子を連れ戻してくる。格闘していた二頭の牡獅子は、争いをやめて牝獅子の表情をうかがう。オガ獅子は、二頭の牡獅子に仲なおりをさせる。

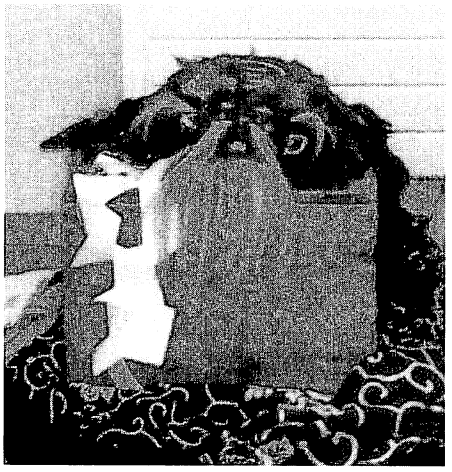
☆　二頭の牡獅子は、仲なおりしたうれしさを唱えながら踊る。

という順序で演じられます。

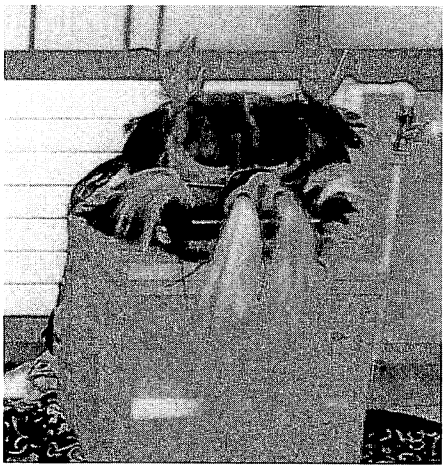
★　旧暦の八月十五日は「獅子納め」の日です。夜は十五夜ですので、

十五夜はお出やる、お月を待ちかねて
あかし立てたり　芋殻松明

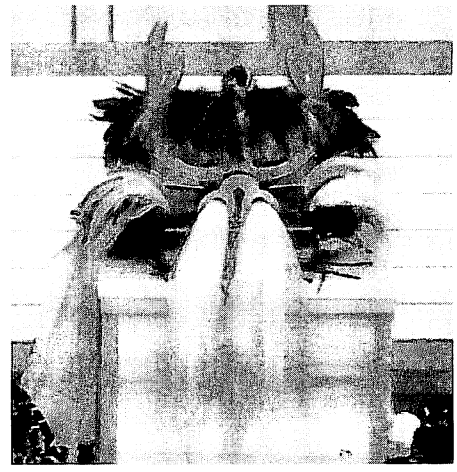
という詞が唄われ、かがり火の周りを回って踊る「十五夜」という内容の踊りが行われます。



オガ獅子の「翁の面」



牡獅子の「獅子頭」



中獅子（牡）の「獅子頭」

牝獅子の「獅子頭」

また、一般の「余興の踊り」の場合と、悪事を祓う「祈祷の踊り」の場合などは、唱える内容も異なってきます。表現動作が演目によってそれぞれ特徴があります。

しかし、伝統的な「獅子頭・マク（白地に赤の牡丹）・装束・装具」を用い、受け継がれてきた「囃子の音色・謡いの詞・踊り手や諸役（いろいろな役）の動き」を基に、それぞれの展開順序に従って獅子踊が進行して行きます。

上十川の獅子踊は、年中行事として地域に根ざして演じられてきている獅子踊と言えます。

昭和二十九年（一九五四）九月二十八日には、自治庁が東京で主催した「全国新市郷土芸能大会」に青森県代表として参加し、第一位に入賞。

平成七年（一九九五）の猿賀神社の獅子踊大会で「神賞」を受賞するなど、素晴らしい実績を示しています。

これも、上十川に住む人々が、いろいろな苦労があったにしても「前の

時代を受け継いでそれを演じてきた努力・後の世に伝える努力」を代々続けてきた、という歩みがあったからだと思います。とても大事なことと思います。

その努力が認められて、「市民俗文化財・県無形民俗文化財」として指定されています。

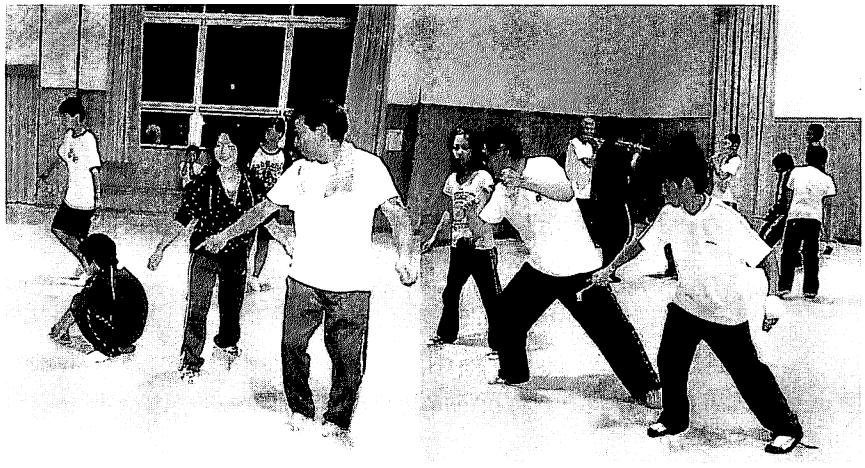
（「上十川の獅子踊」黒石市民俗文化財　指定　昭和五十七年十一月四日）
（「上十川の獅子踊」県無形民俗文化財　指定　平成十一年七月二十三日）

(三) 後継者を育てる活動

現在、獅子踊の行事を進めて行くことや、それを後の時代に引き継いでもらうことが真剣に考えられています。そのために、上十川の人々は「上十川獅子踊保存会」を作って獅子踊を地域で継続していくための活動も行っています。

獅子踊を新しく始める人や地域の子どもたちにも、踊り方や囃子の仕方を教えていますし、上十川の子どもたちも、自分たちの地域に伝わる獅子踊の練習に励んでいます。

子どもたちの練習は、公民館の事業として行われている場・上十川小学



① 踊り方の練習

校の授業（総合的な学習の時間）の場、の双方で行われています。

その様子をお話しましょう。

★ 上十川公民館の事業――「獅子踊講習会」への参加。

「上十川獅子踊保存会」の人たちの指導で、練習は夜に行われます。子どもたちは、お家の人に送り迎えしてもらいます。

★ 上十川小学校の「総合的な学習の時間」で練習。

☆ 最初、踊りを行う人（獅子・オガ獅子・山持ちなど）。囃子を行う人（太鼓・笛・天平鉦など）。謡いを行う人など、担当のグループに別れて練習します。

それぞれのグループには、「保存会」の人たちがついて指導してくれます。

☆ 担当した役の基本練習を終えると「踊り・囃子・謡」を共に行う総合練習。

☆ 衣装を身につけ、踊り・囃子で総合練習。

など、およそ、そのような練習を積んで獅子踊の技を身

③　笛の練習

②　太鼓の練習

④　天平鉦の練習

⑤　保存会・保護者の人たちが見守る中で、「踊り・囃子の総合練習」。

につけていきます。

★　講習に参加して獅子踊の仕方を学び、一定の技を身につけた人には、修了「認定書」が保存会から与えられます。